

四旬節第一主日（9時半ミサ）

2012.2.26

マルコ 1・12-15

今年も四旬節を迎えました。今日の四旬節第一主日のミサにおいて、洗礼を希望し、その決心をされた皆さんをお迎えして、例年のように、洗礼志願式が行われます。志願者の皆さん御一人御一人の心の中に働きかけ、このような決意にまで導いてくださった神さまに感謝して、この志願式の喜びをともにいたしましょう。

今日この志願式を受けられる皆さんは、洗礼のことが意識にちらつくようになってからも、洗礼志願書を提出し、今日の志願式を迎えるまでには、ずいぶん苦しい心の葛藤がおありになったことでしょう。成人になってから洗礼を受けた、ここにおられる信者の多くの皆さんも、そのような葛藤を経て洗礼をお受けになられたのです。どのようなことがあって自分は洗礼を受けようと思ったのか、それを語るとすれば、一人ひとりの人生を語らざるを得なくなるはずで、それは、洗礼を受けるに至った、自分の心の中をさらけ出すようなことです。でも、少なくとも、カトリックの教会においては、そのようなことが求められることはありません。他の人々の前で、自分が洗礼を受けるに至った経緯をあえて事細かに告白しなくてもよいのです。一人ひとりの私たちのうちに起こったことは、一人ひとりの私たちと神さまとの間の秘密なのです。自分がどうして洗礼を受けるようになったかということや、洗礼を受けるということが、自分と自分の心に働きかけてくださった神さまとの間の出来事であると気づくことが、ずっと大切なことなのです。洗礼への決意に至る心の葛藤の中で、神さまが自分の心の中に働きかけてくださっていたと気付くことが出来たらと思います。洗礼式もそれに先立つ洗礼志願式も教会の儀式です。儀式としての今日の志願式においても、そして、やがて迎える洗礼式においても、それに与る緊張感の中にも、儀式としての外面的なことよりも、このような儀式を受ける決意をすることが出来た、御一人御一人の心の中に働きかけてくださった神さまの働きに気づいていただけたらと思います。信仰とは、このように私たちのうちに働きかけてくださる、神さまの働きに気が付き、今日志願者の皆さんがそうされているように、気付かせていただいた神さまの働きかけに信頼して、それを受け入れるということです。洗礼を受けようと思われたのは、よりよい自分になることを望まれたからに違いありません。洗礼を受けるかどうかの迷いの中で、私たちの心の中に神さまが働きかけてくださったことは、このような思いによって知ることが出来ます。神さまはよりよい自分になりたいという私たち一人ひとりの思いを私たちの中に生じさせ、

その思いを導いてくださるからです。そのようにして、私たちは神さまと出会い、神さまを知ることができるのです。ここに集う私たちは皆、そのようにして、自分の心のうちに働きかけてくださった神さまとの出会いを経験し、神さまを信じた者たちです。ここに集う私たちは、私たち一人ひとりの中に、あえて人に語る必要のない、その人の神さまとの出会いがあることを、自分の経験によって知っている者たちです。その経験によって、お互いの心のうちにある神さまへの信仰に対して尊敬の心を抱いている者たちです。お互い同士十分に理解し合えたとは言えなくとも、同じ神さまへの信仰を表明した者たち同士として、互いに尊敬しあえる者たち同士となっているのです。だから、教会においては、必要以上に周りの人たちに気を使わなくてもよいのです。私たちは、一人ひとりの中に働きかけてくださった同じ神さまを信じる者たち同士として、同じ神さまへの信仰の絆によって結ばれている者たち同士であることにもっと信頼をおいてもよいのです。今日の洗礼志願式が、そのようなことに気づき、受け入れることが出来る機会となりますように。

洗礼式するときには額に洗礼の水をかけてもらいます。これから申し上げることは、あくまで比喩的な表現に過ぎませんが、額に洗礼の水を受けるということは、思い切って神さまが用意してくださった洗礼の水の中に、頭から飛び込むということであると言ってもよいかもしれません。水の中に飛び込む時、普通は着ているものを脱ぎます。神さまの前では裸であってもよいのです。むしろ、着ているものを脱ぎ捨てて裸にならなければならないのです。私たちは皆、生まれたときには裸であったはずですが、神さまの前ではそのような自分に返ることが出来るのです。着ているものを脱ぎ捨てた、裸のままのいのちそのものとなった解放感を味わうのです。頭から飛び込むためには、頭の中でいろいろ考えてしまっては飛び込むことが出来なくなります。思い切って飛び込むことによって、私たちは神さまに信頼して生きるということがどういうことであるかを身をもって知ることが出来るのです。そうやって思い切って飛び込んだ当初は猛烈な息苦しさに襲われるかもしれません。けれども、必死になってもがいていると、水の中から顔を出すことが出来ます。その時、私たちは今まで経験したことのないような、呼吸をしている自分に気付くでしょう。自分の中のいのちそのものの呼吸を味わうことが出来ることでしょう。自分の飛び込んだ水の清々しさが忘れられないものとなることでしょう。

洗礼は、それを受ける私たちを決定的に神さまのいのちの中に生きる者とする教会の秘跡です。洗礼によって、私たちは神さまが与えてくださるこの世のいのちを越えた、新しいいのちを生きる者とされるのです。教会の信仰においては、洗礼によって私たちがいただく新しい神さまからのいのちは、イエス・キリストの十字架と復活によって、神さまが私たち全ての者に開き与えてくだ

さった、死を超えて復活に導くいのちです。イエス・キリストを救い主と信じる全ての人に、神さまはイエス・キリストの十字架の死と復活において示されたこの新しいいのちを与えてくださるのです。

「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、全ての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことを全て守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」マタイ福音書の結びに記されている、復活されたイエスのおことばです。イエスの弟子たちから始まった教会は、このイエスのおことばに従って、洗礼を行ってきました。洗礼を受けてカトリックの信者となるということは、このイエスのおことばを受け入れるということです。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」と言われたイエスがそこにいてくださる教会のミサを大切にし、ミサに参加してイエスのみことばを新たに思い起こし、イエスの聖体をいただいて、心のうちに新たにイエスをお迎えすることによって、イエスの弟子として生きるということです。洗礼はこのような信仰のいのちの中に飛び込むということです。洗礼は生涯のうちに一度受ければよいとされています。その意味は、大きな決断をもって洗礼の恵みの中に飛び込んだ私たちは、信仰とは何かを身をもって知った者たちとなるからです。洗礼は信者となった私たちの生涯を決定づける出来事です。私たちの信仰は、洗礼によって示されているように、神さまに向かって飛び込むということです。そのような私たちを神さまがしっかりと受け止めてくださることを私たちは洗礼を受けることによって知ることが出来るのです。私たちがどのようなであっても、私たちがそれを決断し、神さまに向かって飛び込むなら、その都度神さまは私たちをしっかりと受け止めてくださる。十字架のイエスのお姿において受け止めていてくださる。あらゆる挫折と失意の経験の中で、このことを信じる者となることが出来るということが、洗礼によって開かれる、信仰者としての私たちの新しいいのちのあり方なのです。

洗礼志願式の今日のミサの中で、志願者の方々と共に、私たちのこのような信仰が新たにされる恵みを願い求めて祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高